

テーマ別研修

多文化共生の学級経営

—多様性を受け止め、育ち合う学級づくり—

外国人幼児等と共に過ごす学級の中で、一人一人の幼児が多様な姿に出会い、互いの違いに気づき、関心を寄せ親しみをもって関わりながら互いを受け止め、思いが伝わる喜びを感じる多文化共生の学級経営が求められています。

一人一人を大切にする保育の基本は変わりません。しかし、外国人幼児等の思いや実情を捉える力を身に付け、外国人幼児等に対する配慮や援助をより効果的にする方法について学び、どの幼児も豊かな体験ができるような保育について考えていきましょう。

<本講座の構成>

- 1 外国人幼児等が在籍する学級の幼児と保育者の現状
- 2 互いを受け止め合う学級集団の育ち
- 3 幼児が言葉を習得する過程と保育者の援助の在り方
- 4 多文化共生の学級経営

1 外国人幼児等が在籍する学級の幼児と保育者の現状

1-1 外国人幼児等と学級の幼児たちの様々な思い

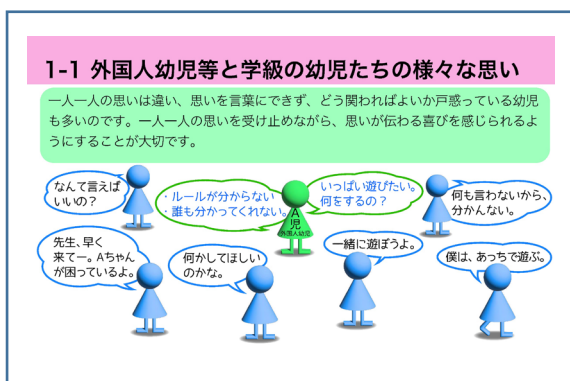
1-2 外国人幼児等の入園当初に保育者が気になる姿

1-3 保育者が学級経営上特に配慮したこと

1-4 共に生活する中で生まれる幼児同士の関わり・育ち

ここでは、外国人幼児等と共に過ごす学級の幼児たちそれぞれの思いに心を寄せて考えてみましょう。そして、保育者が保育の中で戸惑ったこと、一生懸命考えて工夫したことなどと、その結果について、動画を見ながら自園の保育を振り返ることで、外国人幼児等と共に過ごす幼児の思いやコミュニケーションの実情や課題を捉える力を身に付けていただきたいと思います。

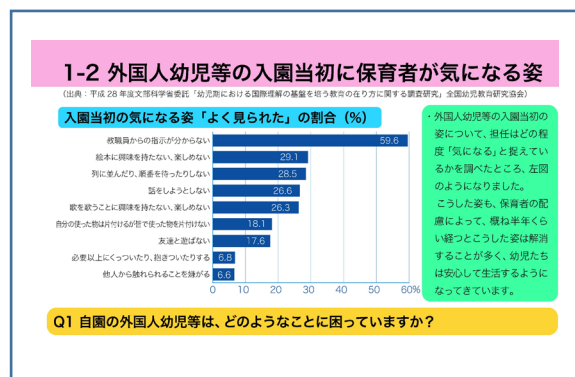
1-1 外国人幼児等と学級の幼児たちの様々な思い



外国人幼児等は、どのような思いをもっているのでしょうか。心細い様子、楽しみな様子などいろいろあります。学級の他の幼児たちも、外国人幼児等をどのように受け止めればよいか戸惑っていることもあると思います。或いは、あまり気にせず自分の遊びに夢中になっている幼児もいるかもしれません。そうした姿は、外国人幼児等が入園式から一緒にスタートなのか、途中入園なのかによっても異なります。

また、年齢によっても周囲の幼児の様子は異なりますので、自園の幼児たちの姿を具体的に思い出してみましょう。

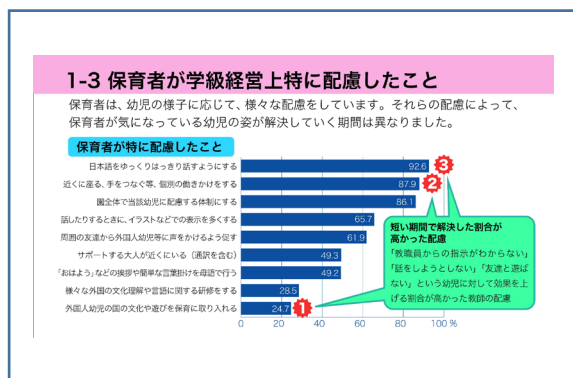
1-2 外国人幼児等の入園当初に保育者が気になる姿



保育者も、外国人幼児等の入園当初は、どうやって園生活になじむようにすればよいか、無我夢中だったと思います。今、改めて幼児たちの様子を思い起してみることは、幼児が課題を乗り越えてきた道筋、まだ戸惑っていることなどに気付くきっかけになります。

また、保育者が外国人幼児等の入園当初に気になった姿と、現在感じていることを比べてみると、幼児たちの育ちに気付くと思います。

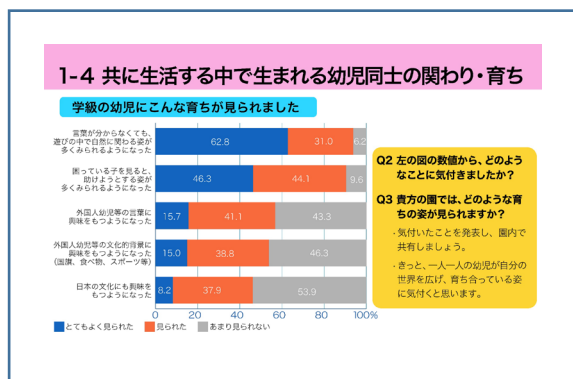
1-3 保育者が学級経営上特に配慮したこと



動画からは、外国人幼児等が安心して園生活を送ることができるように、保育者が様々なことに配慮している様子が読み取れます。十分配慮したと回答している数は、配慮の内容ごとに異なりますが、配慮した結果「外国人幼児の国の文化や遊びを保育に取り入れる」「近くに座る、手をつなぐ等、個別の働きかけをする」「日本語をゆっくりはっきり話すようにする」という援助が、「気になる姿（課題）の解消」につながる割合が高くなっています。

このことも、保育の参考になるでしょう。（※保育者が気になっている姿が、いつ頃解消されているかについては、本テキスト巻末の参考資料 1-2 に掲載しています。）

1-4 共に生活する中で生まれる幼児同士の関わり・育ち



外国人幼児等と学級の他の幼児との関わりによって、双方の幼児の育ちが促されることを示す資料です。多文化共生というと、外国の文化や言葉に興味をもつとか、コミュニケーションができるようになるという育ちを期待するかもしれませんが、しかし、動画に見られるような自然な関わりや困っている人を助けたいと思う幼児は多く見られます。この姿こそ多文化共生の基盤です。こうした育ちが見られるようにするためには、保育者が外国人幼児等と接する態度や言葉などがモデルとなります。

このことから保育者の援助の在り方、学級経営の重要性が分かると思います。

まとめ

外国人幼児等と学級の他の幼児との関わり方や相手に対する興味・関心のもち方は、年齢・発達によって随分異なるものです。具体的に外国人幼児等とのコミュニケーションの様子や遊びの様子などについて話し合う中で、一人一人の幼児の気持ちや育ちに気付いたり、学級経営に気付いたりすると思います。

〈問い・話し合いたいこと〉

- Q 1 貴方の園の外国人幼児等はどのようなことに困っていますか？
- Q 2 スライド 1-4 の「学級の幼児の育ち」のグラフから、どのようなことに気づきましたか？
- Q 3 貴方の園では、外国人幼児等と他の幼児の様子や関わりについて、どのような姿が見られますか？

【ファシリテーションのポイント】

- ・ 担任に対して、まず、「外国人幼児等の姿を見て、どのようなことが気になりましたか」「具体的に、〇〇のような姿があったので、△△と思い、◇◇をしてあげようと思った」など、具体的な話を引き出すようにします。それによって自分の保育を振り返って考えることを促すようにします。
- ・ 他の学級の保育者に対しては、初めは、担任の話の内容について共感的な意見、同じように感じた場面などについて話してもらい、担任の見ていなかった場面で、こんな姿もあったと情報提供してもらおうなど、情報を共有できる話し合いになるようにすることが大切です。
- ・ 自園で気になっていることなど、Q1～Q3を関連付けて対応策について話し合うことが、共通理解につながります。また、保育の改善の参考になるように話し合いを進めることが大切です。
- ・ 答えは一つではありません。話し合っ分かったこと、提案されたことなどを実践してみながら幼児たちの動きを見て、必要に応じて修正していくとよいことも提案してみてください。

2 互いを受け止め合う学級集団の育ち

2-1 分かり合い助けようとする幼児たち

2-2 「援助性」は多文化共生の基盤

2-3 関わり合いの中で気付く多様性

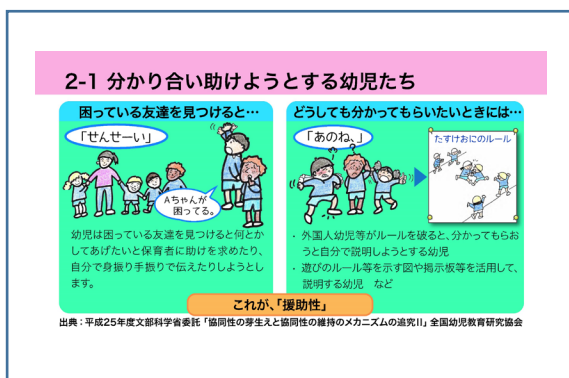
ここでは、外国人幼児等も周囲の幼児も、それぞれの幼児が自分を発揮しながら育ち合う学級集団について考えていきます。そして、外国人幼児等と周囲の幼児との関わりに関する5つの事例から、幼児同士の関わりの中で生まれてくる互いへの親しみ、興味・関心の深まり、自分の価値観と相手の価値観の違いなどに触れ、自分と異なる言語や文化の違いに関する漠然とした気付きなどの育ちの過程を理解します。

保育者は、その漠然とした幼児の気付きが多文化共生の基盤につながることを認識し、多文化共生の基盤を培っていくことが大切です。そこで、まず、幼児が人との関わりの中で自分の力を発揮して友達との世界を広げていく過程や援助性について学び、事例から保育のヒントを発見するとよいと思います。

協議の際は、自園の課題と類似する事例や関心のある事例などを取り上げてみるとよいでしょう。もちろん、全ての事例を読んで、多様な価値観や考え方を知り、自分の保育と関連付けて考えられると、幼児の発達に即した多文化共生の心を育む力につながります。

幼児の発達に即した多文化共生の心を育む力は、是非、皆さんに獲得してほしい力です。

2-1 分かり合い助けようとする幼児たち

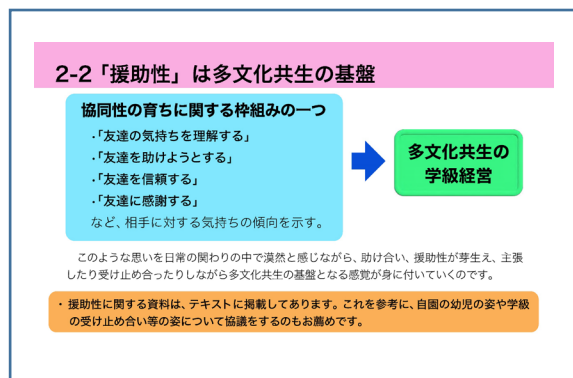


動画のような姿は、相手が外国人幼児等でなくても自分の目の前にいる幼児が困っている姿を見ると、いつでも見られる姿です。自分では相手に分かるように説明はできないけれど、友達のことを助けてほしい幼児は、「せんせーい」と援助を求めてきます。また、動画のように、「教えてあげる」と言って実際にやって見せたり、説明の図を指したりしながら「〇〇だからー」など、ゆっくり確認しながら一生懸命伝えようとする姿も見

られます。ときには、「〇〇でしょっ！」と怒った調子で言うこともあります。助けてあげたい、教えてあげたい、分かってもらいたいなど、様々な思いがありますが、どの姿も、困っている友達を助けてほしい、自分の思いを伝え他者の思いを分かろうとする姿、分かり合いを求めている姿です。

このように考えたとき、多文化共生の学級経営を目指すために、援助性が大きく影響することが分かります。

2-2 「援助性」は多文化共生の基盤

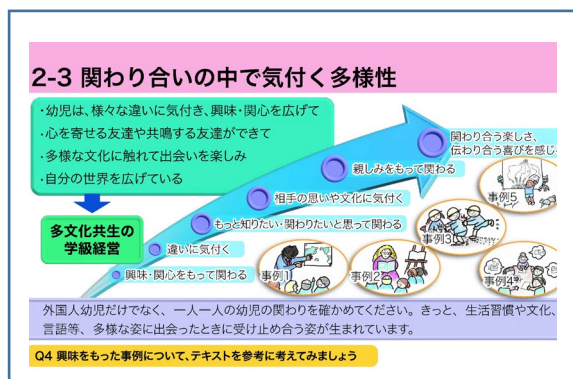


「援助性」は、協同性の育ちを捉えるときの一つの視点です。幼児の協同性をどのように捉えたらよいかについて研究した報告があります。その研究資料の中で、援助性は、**対人意識**の一つの要素（領域）だということが示されています。

こうした友達を助けたい、困っていることがあったら教えてあげたい、そんな気持ちが協同性の芽生えや育ちにつながっていることを知っておくことも大切です。

※ この資料は、平成 25 年度文部科学省委託「協同性の芽生えと協同性の維持のメカニズムの追究Ⅱ」研究報告書（全国幼児教育研究協会）の中で示されています。なお、**対人意識**と**課題意識と力量**の領域に関する簡単な説明は、本テキスト巻末の参考資料 2 に記載しています。

2-3 関わり合いの中で気付く多様性



幼児は、外国人幼児等との関わり合いの中で、自分と違う言葉を使う人や考え方をしている人がいることに漠然と気付いていきます。様々な違いに気付き、興味・関心を広げて、心を寄せる友達や共鳴する友達ができ、友達のよさに気付き、多様な文化に触れて出会いを楽しみながら自分の世界を広げていくのです。

友達の「よさに気付く」というと「褒め合う」ことのように勘違いされがちです。しかし、後に

示す事例 5 に見られるような幼児同士の気付き、相手の特性に関する気付きなどを自分たちの遊びや生活に生かしてこそ「よさを受け止め合う学級経営」です。幼児同士の関わりをこのように丁寧に見てみることで、理解が深まり、多文化共生の学級経営につながります。

〈問い・話し合いたいこと〉

- 学級の幼児たちが外国人幼児等に対して、援助性を発揮している姿、よさや特性に気付く言葉、受け止めようとする姿などの具体的な場面について話し合ってみましょう。
- 本テキストの巻末の参考資料 2 を見て、援助性の内容を確かめて幼児の育ちを改めて捉えてみるのもよいと思います。

2-3 関わり合いの中で気付く多様性（事例紹介）

動画で紹介した事例を詳しく紹介します。自園の実情と関連する事例などを取り上げ、その事例から読み取れることについて話し合ってみましょう。もちろん、全ての事例について取り上げれば、多様な保育のヒントが得られます。

話し合いの進行や内容については、

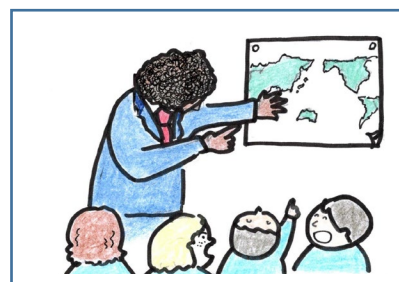
- ・ 下記の〈解説〉や〈問い・話し合いたいこと〉、【ファシリテーションのポイント】、〈例：各園での話し合いで、こんな気付きがありました〉を参考に、園内で様々な視点から話し合ってください。
- ・ 話し合う中で、様々な意見が出ることが期待されます。答えは一つではありませんので、互いが意見を出し合う中で、なぜ、そのように考えたのかを問いかけたりして、そういう考え方もあるのか、・・・など、理解し合うとよいでしょう。

そして、自園の実情や幼児たちの状況に最も望ましいと思う方向を見だし、実践しながら見守ったり、方向を修正したりして、保育を充実させてください。

事例1 世界の国からこんにちは（言葉や文化への興味・関心）

A園では、11か国13名の外国人幼児等が在籍している。それぞれの言葉も宗教も食習慣も違うが、保育者や幼児、保護者は、自然に受け入れている。この状況を生かし多様な国の文化に触れるチャンスと考え、毎月の誕生会に1国ずつ保護者を招いて、挨拶の言葉やおいしい食べ物、子供がよくする遊びを紹介してもらうことにした。

- ・ 外国人幼児等は、自国のことについて堂々と話す保護者の姿を見てとても喜び、他の幼児も楽しみにする姿が見られた。
- ・ 挨拶の言葉は、幼児たちもすぐに覚えて使ってみようとしていた。そのことで、その国の幼児も「教えてあげる」という立場で、嬉しそうな表情を見せた。
- ・ その国の「子供がよくする遊び」では、「ハンカチ落とし」や「だるまさんが転んだ」など、掛け声こそ違っても、かなりの国で同じことを楽しんでいるようで、「おんなじ！」という驚きの言葉が聞かれた。
- ・ 「先生、日本のお母さん（の紹介）は、いつやるの？」という声も聞こえた。



〈解説〉

A園のように多様な言語・文化的な背景を持つ外国人幼児等が在籍する園は、多くはありません。各園の幼児や保護者の実態に応じた企画が大切です。A園の工夫の中で参考になることを挙げると以下のとおりです。

- 【1】話していただくことは、幼児が興味をもつ内容として、各国の挨拶の言葉やおいしい食べ物、子供がよくする遊びなどにしています。

- 【2】 幼児たちの期待感を高められるように、保護者にゲストティーチャーと書いた「たすき」をかけて、雰囲気を作っています。
- 【3】 在籍している外国人幼児等の全ての国に触れるように、年間計画を立てています。

〈問い・話し合いたいこと〉

Q 4 事例1について、感じたこと気付いたことはどのようなことですか？

- 「先生、日本のお母さんはいつやる？」と期待を高めた要因は何だと思いますか？
- このような企画するときに配慮することをいくつか挙げてみましょう。

【ファシリテーションのポイント】

実践の中で保育者は、各国のことを見聞きし、その違いや同じところに気付くことが相互理解の第一歩だと感じました。特に、幼児にとって「お友達の家族が話してくれる」ということが良かったと評価しています。このような経験が多文化共生の学級経営の基盤であり、国際理解教育の柱である「異文化理解」と「自国の文化理解」につながります。

〈例：各園での話し合いで、こんな気付きがありました〉

- ・外国の文化の紹介というと、代表的な祭りや習慣などを取り上げがちだが、この事例では、挨拶の言葉や子供の遊びなど、幼児が興味をもって聞く内容だからこそ「私たちと同じ！」という気付きや喜びにつながったと思う。
- ・外国の遊びや食べ物などについて、相手の思いや文化を知る中で、自分と同じことや違うことがあることに気付くことを大切にしたい。
- ・学級の友達のお母（父）さんなどからお話を聞くことで、より身近に感じることもあるのではないかと思う。
- ・外国人幼児にとって、自分の親が母国について話してくれることは、嬉しく誇りに感じている。保護者にとっても、母国の文化を知ってもらうことができ、嬉しく、子供のアイデンティティの形成や園への信頼を寄せることにつながるのではないか。
- ・自分に関心を寄せてもらっていることを感じることは信頼につながる。
- ・日本人の幼児が「日本のお母さんは、いつ？」と聞いたことから、日本の国＝自分の国も紹介したいという気持ちがあると思う。この気持ちを大切にしたい。

事例2 絵本（外国人幼児等の母語で書かれた絵本の環境の構成）

B児は4歳児の4月にロシアから日本に来たばかりで、日本語がほとんど分からなかった。固定遊具や体を動かして遊ぶことは好きで、何とか友達と関わる様子が見られた。しかし、学級で活動する際には、周りをきょろきょろ見て、何をするのか理解しようとしている。表情も硬く、自分から気持ちを表さないのが、担任はゆっくりと話し掛けるようにするとともに、ロシア語で挨拶したり、絵カードなどを使ったりしながら、意思の疎通が図れるように心掛けていた。

B児の母は日本語で簡単な会話ができるので、幼稚園でロシア語の絵本を読んでもらうことにした。B児は、とても嬉しそうで、周りの幼児も「Bちゃんのお母さんだ」と親しみをもって見ていた。B児の母の声は、とてもやさしい響きで、言葉が分からなくても、みんなが絵本に見入っていた。初めはゆっくりロシア語で絵本を読み、もう一度最初から絵本を見せて、犬の絵を指しながら「犬はロシア語では〇〇と言うの」と話してくれた。その後、幼児たちは、B児に「〇〇ってロシア語で何ていうの?」と聞き、B児が答えてくれると、真似て話す姿も見られるようになった。

このことをきっかけに、少しずつB児が言葉で話すことが増えていった。また学級にロシア語の絵本も置いておくと、幼児たちが自然に手に取るようになり、絵本を見ながらB児とやり取りをする姿が見られるようになってきた。



〈解説〉

- 【1】保育者は、B児が好きな遊びで友達と関われるようにしたり、ロシア語で挨拶したりゆっくりと話し掛けたりしてB児に関心をもってることが伝わるようにしています。
- 【2】B児の母に母語の絵本を読んでもらう機会を作ったことで、B児は嬉しく感じ、周りの幼児もB児の母に親しみをもち、ロシア語に関心をもつきっかけになりました。
- 【3】絵本を学級に置いたことで、友達がロシア語に興味をもち、B児にロシア語を聞いたり、真似て話したりするようになり、環境として絵本が互いの文化や言葉に関心をもつために有効であったと思われます。

〈問い・話し合いたいこと〉

Q4 事例2について、感じたこと気付いたことはどのようなことですか？

- 日本語が分からない外国人幼児等にどのように関わっていますか。
- 外国人幼児等が母語を話すきっかけになる教材や指導の工夫はありますか。

【ファシリテーションのポイント】

日本語が分からない外国人幼児等の思いを捉えようとするとき、どのような工夫が必要でしょうか。幼児同士が互いの文化や言葉に興味をもち、関わっていくようにするために、どのような環境の構成を工夫したらよいでしょう。園でできることを考えてみましょう。

＜例：各園での話し合いで、こんな気づきがありました＞

- ・ 事例のBちゃんの国の絵本は、日本人でも知っているお話だったのかしら？
そうであれば、日本人の幼児にも内容が分かりやすく、「〇〇のお話って、Bちゃんの国のお話なんだね」と気付いたり、興味をもったりするきっかけになるし、知らないお話も聞いてみたくなったりするのではないかしら。
- ・ 知らないお話でも、挿し絵などからイメージを広げて楽しさが味わえるような絵本を取りあげてもらえるとよいと思う。
- ・ 読んでもらった絵本を数日拝借して、皆が見られるように保育室に置いておくなどすると、外国人幼児と周囲の幼児との関わりのきっかけになることが期待できると思う。
- ・ 保育室に、動物や食べ物など分かりやすい絵の絵本や図鑑などがあると、その物の名前をそれぞれの言葉で言い合って楽しんだり、理解したりするきっかけになるのではないかな？
- ・ 絵本を読んでもらった後に、「〇〇は、ロシア語で何というの？ どのような鳴き声？」などと質問するのも素敵ですね。保護者にとっても、母語を大切に受け止められていると感じて嬉しいと思う。
- ・ また、このような機会をきっかけに、保護者が母語を子どもに伝え継承していくことの重要性について、保育者が意識し、保護者と思いを共有する努力が必要かと思う。

事例3 しぐさと言葉（友達と関わりたい気持ちの表現）

C児は両親とも中国人の3歳児で、5月に入園した。日本語は全く分からない状況であったが、友達と遊びたくて同じような動きをしてはしゃぐ姿が見られた。一緒に遊びたい相手の背中をポンポンと叩いて逃げ、追いかけてもらうことを楽しむようになった。すると、他の幼児も同じように背中を叩いて逃げるような動きをするようになり、それがエスカレートして「痛い」と訴えることもあった。

あるとき、周囲の幼児が「Cちゃんが、お砂を・・・。」と保育者に訴えてきたので様子を見にいくと、集中して砂場で遊んでいるC児に、D児と一緒に遊ぼうというつもりでポンポンと叩いたことを嫌がり、両手で砂を投げたり足で蹴ったりしていた。

保育者がそれに気付き、「Cちゃん、嫌だったね。今、遊んでいるのにね」と言った。保育者が『嫌だった』と言うときにとっても嫌そうな表情をしたことで、意味が伝わったようで、こくりとうなずく様子が見られた。「嫌な時は『やめて』って言うんだよ」「一緒に言ってみよう、『やめて』」と言った。すると、C児は、一緒に『やめて』と言って、両手のひらを前に出し、ストップするような動きで『やめて』という言葉を繰り返した。

D児たちも、C児が「されて嫌だと思っている」ということが分かったようだった。その後は、遊びの中で、ふざけすぎて嫌なことがあったり、使っているものを持っていかれたりすると『やめて』という言葉が出せるようになった。同時に、自分がしたことに対して、他の幼児が「やめて」と言ったときに、「ごめんね」という言葉も出てくるようになった。



〈解説〉

- 【1】入園当初は、言葉が話せなくても相手に関心を寄せ、積極的に関わっていく姿を見守りながら、互いに親しみの気持ちちがもてるようにしていきます。
- 【2】『やめて』は否定的な言葉なので、保育者は最初に教えることに抵抗があったのですが、この事例のように、身を守るすべを知らないと困ることを感じて、C児の気持ちを受け止め、友達と関わる上で必要な言葉として、しぐさを伴って知らせるようにしました。
- 【3】3歳児は、自分の思いを相手に分かるようには表現できない傾向があるので、友達と関わる場面を捉えて、互いの気持ちちが伝わるように動きや気持ちを表す言葉を丁寧に投げかけていくことが重要になります。

〈問い・話し合いたいこと〉

Q 4 事例3について、感じたこと気付いたことはどのようなことですか？

- 保育の中で似たような場面をたくさん経験していると思います。その時に感じたことを話し合ってみましょう。
- 友達と関わり合うために、必要な言葉をどのように知らせていますか。

【ファシリテーションのポイント】

外国人幼児等が語彙を増やしていくには、友達との関わりを通して、どのような指導や配慮が必要でしょうか。場面に応じた配慮について、発達と関連させながら多様な考え方を引き出せるとよいと思います。

〈例：各園での話し合いで、こんな気付きがありました〉

- ・ 幼児は、思いを表す行為と言葉が一致したときに言葉を習得していくと思う。それがうまくできないときに、気持ちを受け止めながら代弁することが保育者の務めだと思った。
- ・ 一つ一つの場面で、保育者が外国人幼児等の思いを受け止めようとしていることが伝わるように寄り添っていくことが大切だと思う。
- ・ 幼児を理解するのは、言葉からだけではなく、しぐさ、表情、動きも含めて、幼児の思いを理解しようとする保育者の構えが大事だと改めて感じた。
- ・ Cちゃんのような姿は、幼児期の発達の過程として、日本人同士でもどこの国の幼児でも見られることだと思う。幼児が体験を通して言葉を習得していく過程については、保護者にも丁寧に伝えて温かく見守る雰囲気大切にしていきたい。
- ・ 自分の気持ちを受け止めてもらえるという安心感から、信頼関係が少しずつ築かれていくのではないだろうか。
- ・ 信頼関係を築くことは一朝一夕にはいかない、このような小さなやり取りの積み重ねによって成り立つと言える。

事例4 食文化とお弁当（保護者の思いの受止め）

D園には、中国から来日したばかりの幼児が在籍している。保護者から、昼食に温かいものを（汁物、麺類）を食べさせたいので、「スープポットを持たせたい」「12時に麺類を届けたい」と申し出があった。

担任としては、できるだけ外国人保護者の思いを受け止めたいと思うが、お弁当のふたを開けたときに想定していなかった物が入っていると、それを見た他の幼児の受け止めも気になるので、園内で協議することとした。



〈解説〉

- 【1】D園では、外国人幼児等を受け入れるにあたって、入園前の園長面接の際には翻訳機を活用しながら丁寧に話を聞く時間を設けるようにしています。特に、食習慣については国や宗教、そして家庭によっても違いが大きいので、まず保護者の希望について聞き、そのあと園の生活の仕方を簡単に伝え、擦り合わせをしていくようにしています。
- 【2】保育の中では、お弁当の中身について望ましくないと思うことがあれば即答せずに、園内で話し合ってから伝えるようにしています。学級によって対応に違いがないよう「園として」という対応を、その都度明確にするのです。これによって、今まで無意識に決めていたことが意識化されるので、話し合いが深い学びになっています。
- 【3】例えば、「ラーメンはダメ？」という質問に対しては、「麺類は、時間が経つとおつゆを吸っておいしくなくなるから、おうちで食べてね」というように、理由を幼児にも、保護者にも伝えるようにしています。

〈問い・話し合いたいこと〉

Q4 事例4について、感じたこと気付いたことはどのようなことですか？

- 外国人幼児等が在籍して学級のお弁当を食べているときは、どのような様子ですか。
- 保護者から上記の【3】のような質問があった時、貴方だったらどのように応えますか。

【ファシリテーションのポイント】

ポットに汁物や麺類を入れてあれば、こぼしたりやけどをしたりする危険も考えられます。また、弁当は作ってから食べるまで時間がかかるので、季節によっては傷んでしまうことも考えられます。このような外国人幼児等の弁当に関する保護者の思いや文化について、日頃考えている保育者の思いや悩み事などを、何でも話せるようにします。

安全面、食文化の尊重、周囲の幼児の受止めなどを考慮し、これまで設定していた細々とした弁当の指導に関する園の決まりを見直すなど、多様な視点で意見が出るように進捗を工夫すると、保育者の気づきが深まり、保育内容の改善にもつながります。

＜例：各園での話し合いで、こんな気づきがありました＞

- ・ 日本人の食習慣からすると想定にないような申し出も、それぞれの国の食生活や食事の様子を知ると、納得できるように感じた。
- ・ 保育者は、宗教上の制限など（ハラールやベジタリアンなど）から食べられないものがあることを知識として知っておくことが大切だと思う。
- ・ 日本人の幼児が「どうして？」と質問したり、自分と違うことに疑問をもったりすることもあるかもしれないが、その国の習慣や文化であることを丁寧に説明し、理解できるようにすることが大事ではないか。（他国の文化の理解）
- ・ 日本人の「食」の感覚から判断するのではなく、多様であることを理解し、スープポットなど熱くて危険なものの扱いなどは配慮が必要だが、中身についてはほぼ受け入れられるように思う。
- ・ 園では弁当の習慣を身に付けやすくするために、食事の内容や量を調節して持ってきてもらうよう依頼していることもあるが、外国人幼児等にそのまま当てはめるのではなく、「初めのうちはこのくらいの時間で食べやすいように～」という意図を伝えながら、保護者と食事の内容を決めていくとよいのではないかと。園のきまりとして押し付けないことが大切だと思う。

事例5 劇遊びの配役・台詞の工夫（発達や特性に応じた対応）

D児は、5歳児の2学期から入園した。園内に在籍している同じ国の3人の幼児と遊んでいることが多く、あまり日本語を話そうとしない。学級活動にはなかなか馴染めず、一人になることもある。D児に関心をもっているクラスの幼児が関わろうとするが、あまり嬉しそうな顔をしないことが、保育者は気になっている。

毎年2月に劇遊びを発表する会では、例年5歳児は、幼児たちが創作した話を劇にしている。D児がどのように参加できるか、保育者は、なかなか見通しがもてなかった。1月になりお正月遊びをするようになった頃から、D児が双六に関心をもち始めたので、サイコロの目の数だけ前に進む簡単なルールの双六を保育者が作った。D児は、4人ぐらいの仲間の中に入り、サイコロを振ることや駒が早くゴールに入ることを楽しむようになった。D児に対して仲間の幼児たちは、駒の進む数を指で3と示したり言葉で「さん」と伝えたりしたことで、D児は一緒に遊ぶことの楽しさを感じ始め、「これ何・分かった・できる」など、単語ではあるが日本語を話そうとする姿が見られるようになってきた。

1月中頃に、発表会では1グループ10人ぐらいで、それぞれの内容を考え劇的な活動をするようになった。D児がいるグループは、一緒に双六遊びをしていた幼児たちがメンバーである。内容は、山の上にある薬の実を見つけるために探検に出かけるが、6つの橋があり橋の下に恐ろしい怪獣が住んでいる。どの橋を渡るか、6つの橋のコースはサイコロの目の数で決まる。そして、その橋の下に住む怪獣が示す課題をクリアしながら橋を渡り、実を取りに行けるかというスリルのある内容である。D児がどのように参加したらいいのか仲間を考えることにした。話の内容を保育者が絵に描いて理解できるように伝えると、幼児たちも絵に描いて紙芝居のようなものを作り始め、「そうや。Dちゃんはサイコロ振るのが得意やし、橋のところまでサイコロを振ればいいやん。例えば、6が出たらこま廻しをする。こま廻しができたら怪獣から逃げられ助かることにするとか・・・」「大きなサイコロ作ればいいやん」とアイデアを出し始めたので、保育者が「Dちゃんがサイコロ振ってくれるか聞いてね」と言うと、絵を見せながら「サイコロ振ってくれる」と聞き、D児は「分かった」と喜んでいて、台詞として、「振るときに振りますとってね。5ですとか、逃げられませんでしたとってね」と幼児たちが考え、D児も楽しく発表会に参加し、これをきっかけに日本語が少しずつ話せるようになり、クラスの友達と一緒に遊ぶようになってきた。



〈解説〉

- 【1】この園は、近くに工場がある関係で、外国籍の幼児が多く在籍しています。園生活の流れについては、学級でする活動以外は、学級の枠を超えて自由に他の学級の友達とも関わることができるため、言葉が通じやすい国籍の幼児同士で遊ぶことが多くあります。D児は2学期からの入園であるため、知っている幼児と遊ぶことで安定を図っていると感じながら、保育者は学級の中で他の幼児と関われる機会を探っています。
- 【2】保育者は、日頃から学級の一人一人の幼児のよさや頑張っているところを他の幼児たちに意識的に伝え、互いに認め合える温かい学級づくりに心がけています。
- 【3】D児が興味のある双六遊びを通して、他の幼児とかかわれる機会になればと考え、D児にとって分かりやすい双六を作成しました。サイコロの目の数だけ進み、戻ったり休んだりすることなくゴールを目指すという分かりやすいルールにすることで、他の幼児との関わりができました。
- 【4】保育者が、劇遊びのストーリーを絵に描いたことで、D児はイメージがもちやすくなりました。このことがきっかけとなり、他の幼児たちもストーリーを絵に描いて紙芝居にしました。内容が分かりやすくなったことで、なりたい役や必要な役が明確になり、D児の好きな遊びを思い出し「サイコロを振ればいい」と言う意見が出てきました。
- 【5】D児の台詞について他の幼児たちの一方的な考えで決めるのではなく、「本当にそれでいいか聞いてね」と言う保育者の言葉には、一人一人の考えや思いを大切にしたいという気持ちを込めています。

〈問い・話し合いたいこと〉

Q4 事例5について、感じたこと気付いたことほどのようなことですか？

- 日本語をあまり話せない段階の外国人幼児等が、劇遊びに参加する方法について考えてください。
- 外国人幼児等が学級の中の一人として存在感があるようにするために、どのような配慮が必要になりますか。

【ファシリテーションのポイント】

日本語があまり話せない段階の外国人幼児と他の幼児が、関わり合いながら一緒に遊べる環境や援助のポイントについて話し合ってください。この場合は、ルールが分かりやすい双六を作ったり、劇遊びのストーリーのイメージがもちやすいように、絵で表したりしたことで劇の役や話の内容が明確になりました。もし、あなたが担任だったらどのような工夫をしますか。

一人一人の幼児の存在感がある学級及び幼児同士がつながり友達のよさを感じながら生活できる学級を経営するために、どのようなことに配慮しなければならぬか、自分の体験などを踏まえて自由に話してください。

＜例：各園での話し合いで、こんな気づきがありました＞

- ・ 劇遊びのよさや幼児に育てたいことなど園全体で話し合うことで、劇遊びの教育的価値が共有化され、どのような劇遊びにしたいかなどの内容や方法のヒントが生まれるのではないかと。
- ・ 自分や友達のことについて、知ったり互いを理解したりする機会を作り、日常的に学級の仲間のことを意識する方法を考えてみることで、個々の幼児のよさを感じ、劇遊びのヒントが生まれるのではないかと。例えば、「自分が今、頑張っていること」「友達が今、頑張っていること」など、日常的に話す機会があるといいと思う。
- ・ 5歳児になると言葉の発達の面から劇遊びの台詞は、どのようなことに気を付けることが大切なのか。自分の体験やイメージを自分なりの言葉で表現したり、場面にふさわしい言葉を仲間と共に考えたりしながら、表現する楽しさを感じる体験が、豊かな言葉を育むことにつながるということが分かった。
- ・ 劇遊びにおいて、外国人幼児等に無理のない参加の方法を考えることは、保育者として外国人幼児等の実態や課題を見つめ直す機会になるのではないかと。(例えば、興味・関心は？ 話せる言葉の内容は？ クラスの中で誰に興味をもっているの？ クラスの中で他の幼児はどのように感じているの？ 共通の接点は？ など)

3 幼児が言葉を習得する過程と 保育者の援助の在り方 —思いが伝わる喜びとコミュニケーション能力の育ち—

3-1 言葉の意味や使い方を習得する過程

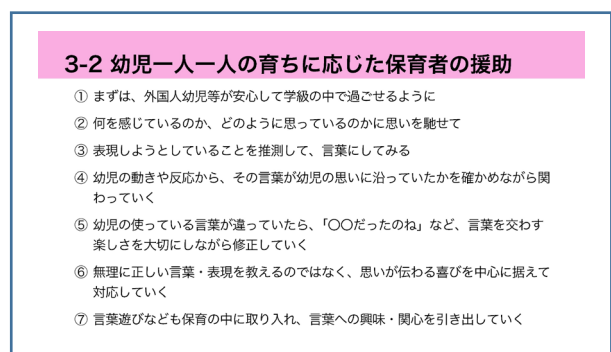
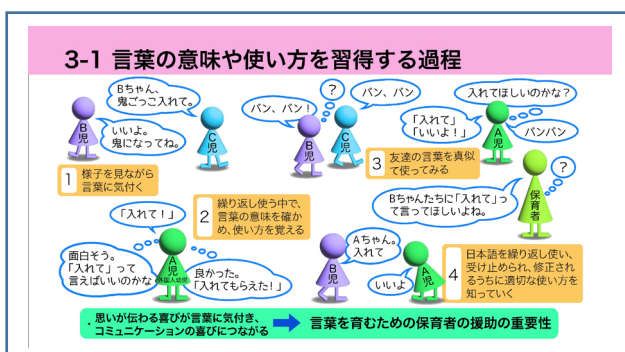
3-2 幼児一人一人の育ちに応じた保育者の援助

ここでは、外国人幼児等が、園生活の中で、周囲の様子から段々と言葉の意味を感じ取り日本語を習得していく過程を具体的な場面を思い起こしながら学んでいきます。

外国人幼児等は、日本語の言葉の意味に気付くと、真似して使ってみて思いが伝わった喜びがコミュニケーションの喜びにつながり、日本語で話してみようとしめます。この過程を理解することによって、「外国人幼児等の日本語の育ちの状況を捉える力や育む力」につながり、保育者は、的確な援助ができるようになります。

3-1 言葉の意味や使い方を習得する過程

3-2 幼児一人一人の育ちに応じた保育者の援助



外国人幼児等は、「入れて」「いいよ」「ダメ！」「ありがとう」など、自分がよく言われている言葉を使いながら、徐々に使える言葉を増やしていきます。外国人幼児等が学級の中で日本語を知り学んでいく大まかな流れは、以下の通りです。

- 1 周囲の様子を見ながら言葉に気付く
- 2 繰り返し使う中で、言葉の意味を確かめ、使い方を覚える
- 3 友達の言葉を真似て話してみ、うまく通じたり、通じなかったりする
- 4 日本語を繰り返し使い、受け止められ修正されながら適切な使い方を知っていく

覚えた言葉をすぐに使って習得していく幼児もいれば、理解はできるようになってもなかなか日本語を使わずに、うなずいたり首を振ったりするなどの身振りや表情でコミュニケーションをとる幼児もいます。保育者は、この状況を的確に捉える必要があります。そして、当該の外国人幼児等の様子に応じて、無理に日本語を言わせるのではなく、日本語

で話す機会をうまく作ったり、じっくりと待ったりすることが必要な時もあります。

例えば、こんなこともありました。エジプトから来日して入園したエジプト人の4歳児A児は、周囲の幼児が遊びに誘うとうなずいて遊びに加わるけれど、言葉を発しません。そして、誕生会の日の出来事。その園では舞台に乗った誕生児は「(名前は)〇〇〇〇です。〇歳になりました」というのが決まりになっていて、皆が心配そうに待っていると、「〇〇です。5歳です」と言ったので、皆は「Aちゃんが、日本語しゃべった！」と大騒ぎ。それ以降は、遊びの中で、知っている物の名前や簡単な日本語で話をするようになりました。

このように、分かっている日本語で話すことに少しきっかけが必要な幼児もいます。A児にとって、ためらいを乗り越えて話してみたら皆が喜んでくれたという学級の雰囲気も励ましになったかもしれません。沢山の日本語の言葉を聞きながら段々と言葉の意味に気づき、それを使って受け止められることで、思いが通じた喜びや伝える喜び、コミュニケーションの育ちにつながることは確かです。

意味が分かった日本語をすぐに使う幼児もいますが、はにかんだり、日本語でうまく話せないことを畏れたりするなど、幼児一人一人の思いは異なります。そんな外国人幼児等が日本語で話をしようとする時期には、幼児一人一人の育ちや日本語に対する壁のようなものに応じて援助していくことが大切です。

<問い・話し合いたいこと>

Q5 幼児一人一人の育ちに応じた援助について大切だと思うことはどのようなことですか。

- 動画に、保育者の援助の在り方について7項目記載していますが、その項目の内容について、実際に思い当たることがあったら、(例えば、「こんな場面で、〇〇〇〇と言葉を掛けたら、こんな姿が見られた」など)園内の他の保育者にも伝えてみましょう。

【ファシリテーションのポイント】

- ・ 外国人幼児等が入園して以来、担任はもとより園全体の保育者は、外国人幼児等が安心して園生活を楽しめるようになってきているかなど、様々なことに心を砕いて対応していたと思います。その意味では、この話し合いは幼児たちの育ちを喜び合うことを第一の目的にするとよいでしょう。
- ・ 外国人幼児等が自分の思いを伝えようとする姿、言葉、周囲の幼児が何とか思いを伝えようとする姿・言葉など、一つ一つを確認しながら保育の喜びを感じることで、次にどのような言葉掛けをしようかと思いを広げるきっかけとなります。

4 多文化共生の学級経営

4-1 外国人幼児を受け入れる準備（途中入園）の例

4-2 自園の多文化共生に向かう状況を捉えてみよう

4-3 多文化共生の学級経営を目指して

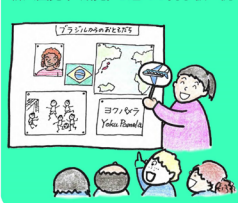
これまで学んだことを総合的に捉え、多文化共生の学級経営について考えることによって、「幼児の発達に即した多文化共生の心を育む力」をブラッシュアップします。

4-1 外国人幼児を受け入れる準備（途中入園）の例

この事例からは、外国人幼児等が実際に登園してくる前から受入れは始まっていること、学級の幼児に新しい友達を楽しみに待つ気持ちを育てていく様子を読み取れます。図や掲示板等の環境の構成については、外国人幼児等の背景を具体的に理解できるようにすることが大切です。例えば、文化的背景を念頭に置きつつも、「ブラジル＝サンバ」「エジプト＝ピラミッド」のような、思い込みのイメージで紹介するのではなく、入園手続きの際に保護者や付き添いの通訳の方等から状況を聞いておくとういと思えます。聞いてみると、意外な発見もあります。また、表記が難しい

4-1 外国人幼児を受け入れる準備（途中入園）の例
外国人幼児等の入園を楽しみに待ち、迎える学級づくり

新入園児（5歳児）を迎える掲示板の例



保育者（T）と子供（C）との対話の例

T 「明日、ブラジルという国から新しいお友達が入園するよ。」
C 「ブラジルって、どこ？」「知ってる。サッカーの国、等
T 「世界地図や地球儀を見せながら」「みんなが住む日本はここで、新しく来るお友達は、ここ、ブラジルという国からくるの。」
C 「なんて言う名前？」
T 「名前は、ヨクバメラさん。さくら組のこと知らないから、バメラさんが困っていたら優しく教えてあげられる？」
C 「うん、でも、ヨクバメラさんは日本語分かる？」
T 「あっ、分からない、どうしよう。」
C 「優しく話す」「やって見せてあげる。」
T 「そうね、ヨクバメラさんがさくら組のこと大好きになるように優しく助けてあげようね。ロッカーの名札は、カタカナとブラジルの文字で書いてあるから、ヨクバメラさんが分からなかったら教えてあげてね。」

外国の文字を書く名札は、面接時に保護者に書いていただくのも一つの方法です。

4-2 自園の多文化共生に向かう状況を捉えてみよう 4-3 多文化共生の学級経営を目指して

4-2 自園の多文化共生に向かう状況を捉えてみよう

自園の幼児たちが興味をもって見たり聞いたりしている姿、互いを受け止め合っている姿、伝え合っている姿など、思い浮かべてみましょう。

- ① 学級の他の幼児たちは、どのように受止め対応していますか。
- ② 外国人幼児等は、日本語についてどのような場面で、どのような言葉を習得しているか考えてみましょう。
- ③ 幼児や学級集団の育ち、保育者や保護者の連携体制などを、担任、他の保育者、管理職等、それぞれの立場から捉えて、気付いたことを発表し合うとういと思えます。
- ④ 幼児一人一人の育ち、学級集団の育ち、園全体の自国文化・外国の文化の取り入れ方等、多文化共生の風土がどの程度生まれているか、みんなで考えてみましょう。

4-3 多文化共生の学級経営を目指して

学級経営とは：学級における教育活動だけでなく、幼児間の望ましい関係をつくり、一人一人が**自分の特性やよさを発揮して自己実現できるような集団づくり**をしていくこと。

- ① 学級経営の基本は、多様性を受け止める視点から
(幼児が、それぞれの**特性や良さを**分かり合い、**生かし合える関係**をつくり)
- ② 多文化共生のモデルは、教師の姿から
(外国人幼児等に対応している教師の姿から、学級の幼児は対応の仕方を学んでいます)
- ③ 多様性を受け止める風土づくりは、**全園で共有してこそ実現する**
(園全体での目標共有・協力体制 → 多文化共生の学級経営：園経営)
- ④ 外国の文化だけでなく、日本の文化の紹介も
(外国人幼児等の国・地域の遊びを保育に取り入れることは、外国人幼児が安心感を得る**有効な方法**です。外国の遊びや文化の紹介だけでなく、日本の遊びや文化の紹介を待つ幼児の気持ちにも気付いて！)

➡ 教育課程・指導計画、全体的な計画への位置付け

保育の進め方、学級集団としての姿など、多文化共生の状況をどのように捉えるとよいかについて、この動画で解説したことをまとめてスライドに示しています。皆さんで話し合い共通理解につなげましょう。

〈問い・話し合いたいこと〉

- Q 6 多文化共生の風土がどの程度生まれているか、園全体や学級経営の様子を振り返り、今後どのようなことに取り組みたいかを考えてみましょう。
- 外国人幼児等を受け入れる学級で、迎える気持ちを育みたいという保育者の働きかけや環境の構成の事例です。自園でどのような準備をしようか考えてみましょう。

【ファシリテーションのポイント】

- ・ 事例を参考に、自園で実践できそうなこと、やってみたいと思うことなどについて意見を求めてみましょう。意見を聞いて、「名札を保護者を書いてもらえば、保護者も喜びそうね」など、保護者と心のつながりのきっかけになることを伝えるなどして、保育者がやってみようとする気持ちを引き出してください。
- ・ 「自園の多文化共生に向かう状況」については、自分の保育を振り返って、思い当たる援助の具体的な場面を話し合ったりするのも、自信や共通理解につながります。
- ・ 「多文化共生の学級経営を目指して」については、この研修のまとめとして解説し、研修の振り返りにつなげるとよいでしょう。
- ・ その際、あれができていない、これができていないと反省に終わるのではなく、○ ○と気付いたことについて、「あまり意識してはいなかったけれど、○○していたことなど、考えてみれば多文化共生につながっていたのね」「こうやって視点をもって見ると、気付くことが多いですね」など、振り返りでの気づきを認め、次の行動への意欲喚起につなげるとよいと思います。

研修の振り返り —課題が生まれる可能性—

研修の振り返り —課題が生まれる可能性—

・5歳児5月、リレーを始めたとき、周囲の幼児からケニア人のF君に「F君は絶対に早いはずだよ」「頑張ればすごく速いんだよ」という声が聞こえた。しかし、実際に走ってみると、想像と異なった。

・担任は幼児の言葉に戸惑い、「頑張ってるよね」と本人に声を掛けた。みんなから「本気で走れば速いよ」と励まされたF君は、一生懸命練習をし、ぐんぐん速く走れるようになって運動会ではリレーのアンカーとして活躍した。

・周りの幼児は「やっぱり」「オリンピックに出てね」と言い、保護者からも「やっぱり、F君速いですよね」という感想が寄せられ、園側は複雑な思いが残った。

【ポイント】

・学級の幼児たちから期待をかけられ、励まされ勇気づけられたF君は、自分を信じて見事に育っている事例ということもできます。

・オリンピックが近づいて様々な報道に触れ、幼児なりに陸上競技の特性・身体能力を感じ取っている姿とも言えます。

・しかし、このほほえましい事例の中にも、多文化共生の視点から見ると、課題が生まれる可能性もあることを知っておく必要があります。

なぜ、園側は「複雑な思い」をもったのか考えてみましょう。

本研修の振り返りとして、このスライドに示すような事例に出会ったときに、どのように考えればよいか、一人一人が文章にまとめてみるのもよいでしょう。一見ほほえましい事例ではありますが、どのような事例でも見方や対応の仕方によっては、将来課題につながる可能性があることを学び取ってほしいと思います。

- 【1】 テレビ等で見ると外国人の活躍を目にする機会が増えて、「黒人は走るのが速い」というような先入観が生まれたようです。3・4歳児の頃にはあまり見られなかった実態です。
- 【2】 外国人のF君への期待と励まし合いはほほえましく、育ち合いへの期待もあるので、どのように対応していくか、保育者は悩んだと言っています。幼児たちの様子は、人種差別につながるように思えますが、「〇〇〇であるはず」という思い込みやイメージが、個人を戸惑わせたり苦しめたりすることにつながる可能性があるため悩んだのです。
- 【3】 今回の結果は良かったかもしれませんが、本当にこれで良かったのか。この事例では、外国人幼児が目標をもち、自己肯定感や意欲をもつことにはつながりました。しかし、このリレーの経過の中で、「どの国の人でも、得意なことや苦手なことがあり、一人一人違って良いこと」や、「F君が速く走れるようになりたいという自分への期待をもって頑張ったこと」が大切なことを、幼児たちに伝えたいものです。
- 【4】 幼児は感じたままを言葉にするので、保育者は、時々悩むことがあります。大切なのは身近な大人がその言葉や状況にどう反応するかではないかという話になりました。保育者が、「これ、なんか変？」と感じたことにしっかり向き合うことが、とても大切です。根本的に潜んでいる課題や課題につながる可能性に気付く力と、その状況に応じた対応によって多文化共生の心を育む力を身に付けたいものです。

〈問い〉

Q7 なぜ、園は「複雑な思い」をもったのか考えてみましょう。

○ F君と周囲の幼児たちは、どのような思いをもっているか考えてみましょう。

【ファシリテーションのポイント】

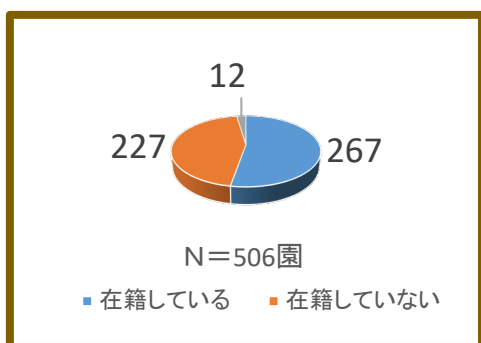
- ・ 各保育者の発言や自分の考えを文章にまとめる作業の中で、この研修が目指す保育者の力である「異文化の中で生活する外国人幼児等が戸惑う気持ちや周囲の幼児との関わりを捉える力」や「幼児の発達に即した多文化共生の心を育む力」が深まった点を意識付け、参加者で認め合える雰囲気があるとよいと思います。

もっと深く学びたい園のための参考資料

〈参考資料 1〉

平成 28 年度文部科学省委託「幼児期における国際理解の基盤を培う教育の在り方に関する調査研究」の報告書から特に本研修と関係の深いデータのみを紹介します。

【資料 1-1】外国人幼児が在籍している園数（園）

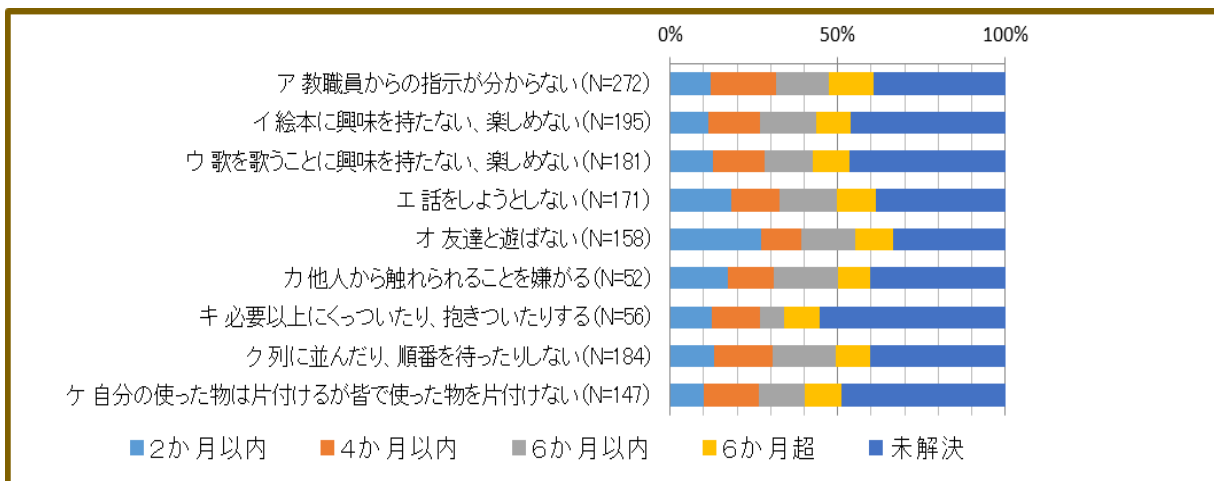


調査地域：(①集住地域…群馬県、愛知県、滋賀県、②都市型分散地域…東京都、神奈川県、大阪府、福岡県、③少数地域…岩手県)

調査対象地域の半分以上の幼稚園に、外国人幼児が在籍していることが分かります。

【資料 1-2】入園当初に教師が気になった姿が見られなくなった時期

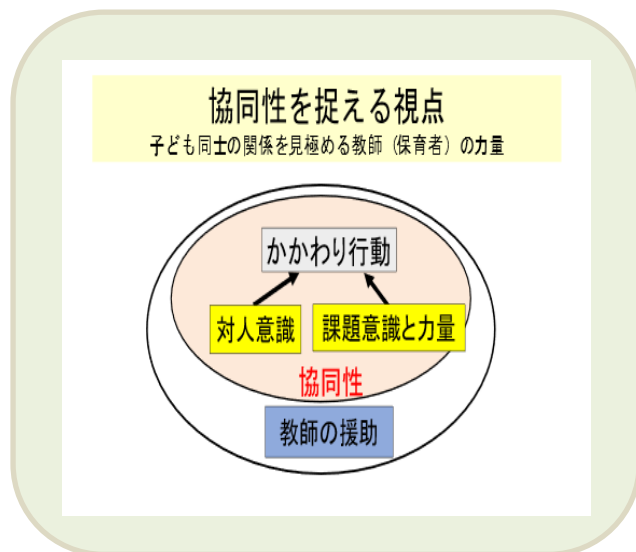
半年前後で、外国人幼児の気になる姿が見られなくなる様子が分かります。



〈参考資料 2〉

平成 25 年度文部科学省委託「協同性の芽生えと協同性の維持のメカニズムの追究Ⅱ」（全国幼児教育研究協会）の報告書資料から、「協同性」を捉える視点の中の「対人関係」の領域に位置している「援助性」について簡潔に紹介します。

【資料 2-1】 協同性を捉える視点について



協同性の育ちを捉えるためには、幼児同士の関わり行動に着目することが大切です。その「関わり行動」を左右する視点として、一人一人の幼児の「対人意識」と「課題意識と力量」が影響する。さらに、その関わりが円滑に進められるようにするためには、教師の援助が重要な役割を果たすことになります。

【資料 2-2】 「対人意識」を捉えるための領域と項目

領域	項目
他者への 欲求・評価	他の幼児と仲良くしようとする
	他の幼児に勝とうとする
	他の幼児に認められようとする
	他の幼児のよさを認めようとする
気持ちの 共有	ポジティブな気持ち(楽しい、嬉しい)を共有する
	ネガティブな気持ち(嫌だ、不快等)を共有する
	気持ちの揺れ(迷い等)を共有する
援助性	友達の気持ちを理解する
	友達を助けようとする
	友達を信頼する
	友達に感謝する

幼児は他者との関わりの中で様々な気持ちを感じています。困っている相手の姿を見て、幼児なりに対応しながら多様な姿を受け止め合う関係が育まれていきます。

【資料 2-3】 **課題意識と力量**を捉えるための領域と項目

領域	項目
個別性	自分なりの遊びのイメージをもつ
	自分なりの遊びの目的や課題をもつ
	自分なりの遊びの楽しみ方がある
共有性	遊びのイメージを友達と共有する
	遊びの目的や課題を友達と共有する
	遊びのルールを友達と共有する
発展性	遊びの中で友達と役割を分担する
	もっとおもしろくなるよう工夫する
	問題点に気付いて修正しようとする
	課題達成に向けて繰り返し取り組む

課題意識を共有しているか、もっと発展させようとしているのが遊びの充実と関係します。

こうした課題意識と幼児自身の力量と折り合いをつけて具体的な関わり行動となって表れるのです。